

日本の名作名文ハイライト

# 平凡

一葉亭四迷

朗読 長田昭子

出所 ザ・架け橋 Story Telling

<http://the-kakehashi.jp/>

teabreak 編

# 平凡 一葉亭四迷

● 中途部分

十三

犬嫌の父は泊めたその夜を啼明されると、うんざりして了って、翌日は是非「逐出すと言出したから、私は小狗を抱いて逃回って、如何しても放さなかった。父は困った顔をしていたが、しかしそのも一時の事で、その中に小狗も独寝に慣れて、夜も啼かなくなる。と、逐出すはずの者に、如何しかポチという名まで付いて、姿が見えぬと父までが一緒に捜すようになって了った。

父がこうなったのも、無論ポチを愛したからではない。ただ私に羈されたのだ。私とてもポチを手放し得なかったのは、強ちポチを愛したからではない。愛する愛さんはさて置いて、私はただ「可哀そうだったのだ。親の乳房に縋っている所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の子の運命が、子供心にもいかにも果敢なく情けないように思われて、手放すに忍びなかったのだ。

この忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心が搦み合った処に、ポチは旨く引掛って、辛くも棒「石塊の危ない浮世に彷徨う憂目を免れた。で、どうせ、それは、蜘蛛の巣だらけで

は有ったろうけれど、兎も角も雨露を凌ぐに足る椽の下の菰の上で、甘くはなくとも朝夕二度の汁掛け飯に事欠かず、まず無事に長びりと育った。

育つに随れて、丸々と肥って可愛らしかったのが、身長に幅を取られて、ヒョロ長くなり、面も甚くトギスになって、ちよつと狐のような犬になって了った。前足を突張って、尻をもったてて、弓のように反って伸をしながら、大きな口をアングリ開いて欠びをする所などは、誰が眼にも余まり見とも好くもなかったから、父は始終厭な犬だ厭な犬だと言って私を厭がらせたが、私はそんな犬振りで情を二三にするような、そんな軽薄な心はいささかもない。固より玩弄物にする気で飼ったのでないから、厭な犬だと言われる程、なお一可愛ゆい。

ねえ、阿母さんこの様な犬は何処へ行ったって可愛がられやしないやねえ。だから家で可愛がって遣るんだねえ。」

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、調戯う父と争った。

犬好は犬が知る。私のこの心はポチにも自然と感通していたらしい。その証拠には犬嫌いの父が呼んでも、ほんのちよつとお愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもせんで行ってう事がある。母が呼ぶと、不断食事の世話になる人だから、また何か貰えるかと思つて眼を輝かして飛んで来る、而して母の手中にそのらしい物があれば、兎のように眺ねて喜ぶ。が、しかし、ただその丈の事で、その時のポチはやはり

犬に違いない。

そのやはり犬に違いないポチが、私に對うと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？ ……何方だかそのは分らんが、とにかく互の熱情熱愛に、人畜の差別を發なして、渾然として一一如となる。

一一如となる。だから、今でも時々私は犬と一緒に成つてこの様な事を思う、ああ、ままになるなら人間の面の見えぬ処へ行つて、飯を食つて生きてたいと。

犬もきつと然う思うに違いないと思う。

#### 十四

私は生来の朝寝坊だから、毎朝二度三度覺されても、中々起きない。優しくしては際限がないので、母が最終には夜着を剥ぐ。これで流石の朝寝坊も不承々に床を離れるが、しかし大不平だ。額で母を睨めて、津蟹が泡を吐くように、沸々言っている。ポチは朝起だから、もうその時分には疾くに朝飯も済んで、一切り遊んだ所だが、私の声を聴き付けると、何処にいても一目散に飛んで来る。

これで私の機嫌も直る。急に現金に莞爾々々となつて、急いで庭へ降りる所を、ポチが透さず泥足で飛付く。細い人參程の赤ちやけた尻

尾を懸命に掉り立って、嬉しそうに面を瞻上る。視下す。目と目と直たりと合う。堪まらなくなつて私が横抱に引ン抱く。ポチは抱かれながら、身を藻掻いて大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、顚を舐め、頬を舐め、舐めても舐めても舐め足りないで、悪くすると、口まです舐める。父が面をしかめて汚い汚いと曰う。なるほど、考えて見れば、汚いようではあるけれども……しかし、私は嬉しい、止められない。如何してこれが止められるもんか！ 私が何もいい物を持っているるじゃなし、ポチもそのは承知で為る事だ。利害の念を離れているのだ、ただ懐かしいという刹那の心になっているのだ。毎朝これでは着物が堪らないと、母はそのを零すけれど、着物なんぞの汚れを厭つて、ポチのこの志を無にする事ができた話だか、話でないか、そこを一つ考えて貰いたい。

理屈はさて置いて、この面舐めの一儀が済むと、ポチも漸とこれでは気が済んだという形で、また庭先をうろうろし出して、椽の下などを覗いて見る。と、そこに草鞋虫の一杯依付った古草履の片足か何ぞが有る。いい物を看付けたと言ひそうな面をして、そのを啜え出して来て、首を一つ掉ると、草履は横飛にポンと飛ぶ。透さず追集けて行って、また啜えてポンと放る。その様な他愛もない事をして、活発に元氣よく遊ぶ。

その隙に私は面を洗う、飯を食う。それが済むと、今度は学校へ行

く段取になるのだが、この時が一日中で一番私の苦痛の時だ。ポチが跟を追う。うっかり出ようものなら、何処迄も何処迄も随いて来て、逐ったって如何したって帰らない。こっそり出ようとしても、出掛ける時刻をチャンと知っていて、その時分になると、何時の間にか玄関先へ回って待っている。仕方がないから、最終には取捉まえて否応なしに格子戸の内へ入れて置いては出るようにしていたが、然うすると前足で格子を引搔いて、悲しい悲しい血を吐きそうな啼声を立てて後を慕い、姿が見えなくなっても啼止まない。私もそれは同じ想だ。泣出しそうな面をして、バタバタと駆出し、声の聞えない処まで来て、漸くホツとして、普通の歩調になる、而して常も心の中で反覆し反覆しこの様な事を思う、

「僕がいないと淋しいもんだから、それで彼様に跟を追うんだ。可哀そうだなあ……僕あ学校なんぞへ行きたかないんだけど……行かないと、阿父さんがポチを棄てツ了うツて言うもんだから、それでシヨウがないから行くんだけど……」